



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	15世紀におけるモスクワ教会の独立とその正当化作業 : フェラーラ・フィレンシェ公会議観の変化を中心に
Author(s)	宮野, 裕
Citation	西洋史論集, 11, 60-90
Issue Date	2008-07-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/37480
Type	departmental bulletin paper
File Information	11_60-90.pdf



一五世紀におけるモスクワ教会の独立とその正当化作業 ーフェラーラ・フィレンツェ公会議観の変化を中心にー

宮 野 裕

はじめに

一五世紀にモスクワ府主教座教会がビザンツ帝国下のコンスタンティノープル総主教座の下から事実上の独立を達成するに際し、一四三八年からフェラーラ及びフィレンツェにて開催された公会議が一定の意味を持ったことは疑いない。但しその具体的な意味については、以下本稿で述べられるように、考察の余地がある。

既に一九世紀のH・カラムジン以来確立されている見方を大まかにまとめるならば、会議における東西教会合同の決議はモスクワで拒絶されたものの、そのこと自体はビザンツによる教会支配の拒絶には直結せず、またモスクワ教会を独立へ促すこともなかったとされる。^① 具体的に言えば、合同決議を到底受容できなかったモスクワは一四四一年、会議に出席して合同に署名した府主教イシドール（ギリシア名イシドロス。在位一四三七―四一年）をその帰国後に廃位したが、この

段階でモスクワにはビザンツと袂を分かつ考えはなかった。現にモスクワ大公ヴァシーリー二世（在位一四二五―六二年）は、イシドールの廃位について説明しながら府主教選出をルーシ（ロシアの古名）に認めるよう求める勅書をコンスタンティノープルに宛てて作成した。^② その後の経緯については研究者により意見は分かれるが、ともかく紆余曲折を経て、最終的に一四四八年、大公と主教会議がビザンツの了承なしにヨナ（在位一四四八―六一年）を独自に府主教として選出し、この段階においてモスクワ教会は事実上の独立を達成したと考えられてきた。^③

ところがその一方で一五世後半になると、事実上反して、会議と府主教の選出とを直結させ、モスクワ教会が会議直後からビザンツからの独立を志向したかの如く描く著述が登場してくる。例えば、会議から二〇年経過した一四六―六二年頃には『聖なる書物から選び取られた、ラテン人に対する話。ラテンの第八会議（フェラーラ・フィレンツェ会議のこと）（以下引用文中の□は筆者の注）の開催、誘惑

者イシドールの廃位、ルーシの地における府主教たちの叙任についての物語」(以下『ラテン人に対する話』)が出現し、そのなかではフェラーラ・フィレンツェ会議とその決議の拒絶が直接的に一四四八年のヨナの選出に、更に一四六一年の府主教フェオドーシー(在位一四六一―一六四年)の選出に結び付いたかのように記された。そしてこの図式は後には大公の公式年代記にも採用されていく。⁴⁾

このように、①現実のレベルでは会議を直接の契機として府主教の選出が生じたわけでも、またモスクワ教会が独立に向かつて自ら歩み始めたわけでもなかったのであるが、他方で②一五世紀後半以降になると、府主教の選出や独立が会議の結果直接的に生じたとする著述が大勢を占めるようになってくる。本稿筆者は、まさにこのギャップに関心がある。そして同時に次の疑問が生じる。第一に何故この時期に、現実に対して会議と後代の府主教選出が直結させられたのか。加えて第二に、そうした図式がどのようにして作成され、最終的に国家公認の物語と化していったのか。

こうした疑問を解くための参考になるのが、「第三ローマ論」の研究におけるH・B・シニツィナの次の意見である。すなわち彼女によれば、一四五八年にローマからイシドールの弟子グリゴリーが府主教に任じられて到来し、彼をリトアニアが受け入れたことがモスクワ教会の反カトリック的立場の形成にとって重要であったという。ここで彼女が例示するのが、まさに上掲の『ラテン人に対する話』の成立である。彼女によれば、この『話』の成立は上述の現実を受けた結果だった。すなわちグリゴリーの受け入れにより、長い間、モスク

ワとリトアニアという異なる国家の下にありながらも一応の一体性を保っていた「キエフと全ルーシの府主教座」が分裂した。ここで初めて反カトリック的雰囲気急速に高まり、これが『話』の成立を招いた。そこでは九一一世紀までの正教とカトリックとの分裂の歴史も含め一四五八年の府主教区分裂に至るまでの歴史が叙述され、会議は今回の分裂をもたらした直接の原因であるとして批判的に描かれたという。⁵⁾

本稿の筆者は、グリゴリーの到来を反カトリック的傾向の興隆の一契機とする彼女の意見には同意できる。しかし、既にA・C・パヴロフが『ラテン人に対する話』そのものの研究において指摘したように、この『話』は分裂の叙述を軸にした著述ではないと考えられる。⁶⁾ そのことは第一に、『話』の内容の構成が示していると言えよう。すなわち、『話』は大きく二部に分けられており、それぞれで①会議について、②ヨナ及びフェオドーシーの選出について叙述されている。また『話』全体の表題も示唆的である。すなわち『聖なる書物から選び取られた、ラテン人に対する話』。ラテンの第八会議の開催、誘惑者イシドールの廃位、ルーシの地における府主教たちの叙任についての物語』と。つまり、グリゴリーの到来はもちろんモスクワ教会に衝撃を与えたが、その衝撃は少なくともこの『話』においては、直接には、府主教座の分裂ではなく、ヨナ及びフェオドーシーの選出に結び付けられているのである。従って筆者の考えでは、この『話』の内容及びこれが作成された文脈の考察は、一四六〇年頃になぜ会議が、ヨナ及びフェオドーシーの選出と結び付けられて描かれるようになったの

かという問題を解く一つの鍵になる。

他方で本稿では、そうした新たな図式がどのようにして形成されたのか、その経緯をも見ていく必要があると考える。ここで指摘されるべきは、『話』の第一部、つまり会議について描かれた部分には、実は元になった著述が存在するという事実である。その著述というのは、実際にモスクワの使節団の一員として会議に参加したスズダリのシメオンという人物により執筆された『イシドールの会議と彼の旅』(以下『会議と旅』⁽⁷⁾)である。そこには議論内容を含めて会議の様子が描かれている。彼自身は合同に反対し、帰路にてその主人と袂を分かった。彼は使節団から抜け出し、別ルートでのモスクワに向かい、その途中にノヴゴロドに寄留した。そこで会議において彼が取ったメモをもとにして『会議と旅』を作成したと彼は自らそのなかで述べている。⁽⁸⁾

まさにこの著述が後にシメオンの手を離れて改訂を蒙り、上述の『ラテン人に対する話』に昇華した。更にこの『話』は最終的に国家の公式年代記で利用されるに至った。加えて重要なのは、シメオンの著述に始まるこの一連の著述の伝統は、年代記に記される簡素な記録を除けば、一五世紀のモスクワにおける唯一の会議観であるという事実である。つまり、『会議と旅』からの幾度かの改訂作業およびその特徴を検討することにより、独自の府主教選出の契機として、またモスクワ教会独立の直接の契機として会議を描こうとする一五世紀後半における志向がいかに形成されたのか、その形成過程を通時的に検討できる。

そこで本稿では、『会議と旅』の変遷を確認しながら、それがいかなる事情で一五世紀後半に改訂され、現実の過去とは異なる新しい図式が作成されたのかを詳細に検討することを具体的な課題とする。若干長くなるが、第一章で会議直後の会議観が詳しく検討される。その後、第二章でグリゴリー到来による会議観の変容が、第三章では公式年代記への編集について検討される。

最後に『会議と旅』そのものの研究について言えば、一八七五年のA・ポポーフの研究以降、その諸版のテキストが刊行され、その相互関係が明らかにされてきた。⁽⁹⁾ シニツィナも前掲の研究において、『会議と旅』の諸版の関係を再検討し、諸版の新しい相関図を提示している。⁽¹⁰⁾

注

- (1) Каразин Н. История государства Российского. т. 5. СПб., 1842. С. 194; Соловьев С. М. Сочинения. кн. 2, М., 1988, С. 563-568; Макарий. История русской церкви. Т. 6. СПб., 1887, С. 10-15; Дьяконов М. Власть московских государей. СПб., 1889, С. 54-60; Голубинский Е. Е. История русской церкви, т. 2-1, М., 1900, С. 471-485; Cherniavsky M. The Reception of the Council of Florence in Moscow, *Church History* 24 (1955), pp. 347-359; Alef G. Muscovy and the Council of Florence, *Slavic Review* 20 (1961), 3, pp. 389-401; Зичин А. А. Витязь на распутье. М., 1991, С. 93-94; Fennell, J. A *History of the Russian Church to 1448*, London and New York, 1995, pp. 179-183; Obolensky D. *The Byzantine Commonwealth*. London, 2000, pp. 268-269. 但し会議後すぐにモスクワ教会は独立したとする意見がない訳ではない。Успенский Ф. И. История Византийской империи. т. 3, М., 1948, С. 774.

- (2) 当時の総主教が合同派であったことを考慮して、実際には(1)

書簡は送付されなかった。Alef, Muscovy, p. 392.

- (3) G・アレフの整理によると、一四四八年のヨナ選出の原因に関しては、①ここに至ってモスクワはビザンツの教会へゲモニーを拒否した、②モスクワはビザンツの認可を待ちきれなかった、③イシドールが再度モスクワに到来することを恐れた、とする三つの説がある。アレフ自身は、④国内状況の要請によるとする説を採用。加えてアレフの場合には、一四四八年のヨナ選出もまたビザンツの支配の拒絶を意味しなかったとさえ述べている。Alef, Muscovy, pp. 389-401.

- (4) この点に関して、Я・С・ルリエーの議論が興味深い。彼によれば、会議への批判が社会政治評論において出現したのは一四五〇年代であり、公式年代記におけるその登場に至っては会議後三〇年以上経った一四七〇年代であったという。ルリエーは、以上の主張を、同時代史料である『イシドールの会議と彼の旅』の諸版を利用して論じた。Друбе Я. С. Идеологическая борьба в русской публицистике конца XV - начала XVI века. М.-Л., 1960, С. 368-372.

- (5) Сивичева Н. В. Третий Рим. М., 1998, С. 89-115. 彼女は、①一四五八年以降のモスクワとリトアニアの間での府主教区の分割、②九一一世紀の教会分裂の歴史、③フェラーラ・フィレンツェ会議が、『ラテン人に対する話』のなかで一つの壮大な物語として結び付けられたと考えている。

- (6) Платов А. Критические опыты по истории древней греко-русской полемике против латинян. СПб., 1878, С. 107.

- (7) Ф・Делекторусキーが指摘したように、シメオンは十分にはギリシア語を理解できなかったと考えられ、従って議論の内容は、不十分にしか伝わっていないと考えられる。現に、聖餐や聖霊論に関する議論について彼は全く言及していない。しかしモスクワでは、このシメオンが持ち込んだ情報がその後の会議観形成にとって決定的な役目を果たすことになる。Делекторский Ф. И. Критико-

библиографический обзор древнерусских сказаний о флорентийской унии. // Журнал министерства народного просвещения, Ч. 300. СПб., 1895, С. 138-139. 尚『会議と旅』以外にも、モスクワの会議参加者の手になる二つの著述が残されている。①イシドールに同行して会議に参加したスズダリ大主教アヴラーシイ(在位一四三二—四八年)の「遍歴 изложение」、②アヴラーシイの従者である匿名のスズダリ人の手になる「フィレンツェ会議への旅 хожение」、③同じく匿名著者の筆になるローマについての「短評」。しかしこれらは旅行記然としており、会議には殆ど言及していない。

- (8) Малинин В. Н. Старец Еглезарова монастыря Филофей и его послания. Киев, 1901, С. 89, 92.

- (9) Платов А. Историко-литературный обзор древне-русских сочинений против латинян. М., 1875, С. 344-395; Платов, Критические опыты, С. 97-112; Делекторский, Критико-библиографический обзор, С. 131-184; Черепнин Л. В. К вопросу о русских источниках по истории Флорентийской унии. // Средние века, № 65. М., 1964, С. 178-179.

- (10) Сивичева, Третий Рим, С. 79-84, 100-108.

一 会議直後の会議観

(一) 『会議と旅』の成立、その概略

ここではまず、モスクワにおける最初の会議観を含んでいると言え『会議と旅』のストーリーを大まかに述べておこう。

『会議と旅』では、導入部において、会議で合同に署名しなかった四人の府主教(エフェソスのマルコス、イヴェリア〔グルジア〕のグレゴリオス、アギヤ〔?〕のソフロニオス、ベレスチン〔パレスチナ?〕

のヘサイアス)、そしてビザンツ皇帝ヨハネス八世パレオロゴス(在位一四二五―一四八八年)や教皇エウゲニウス四世(在位一四三一―一四七年)等会議に出席した主要人物の名が挙げられている。そこにはモスクワの代表団を統率した府主教イシドール、彼に随行したスズダリ大主教アヴラーミー(在位一四三一―一四八八年)、そして『会議と旅』の著者シメオンの名も含まれている。彼はここで、『会議と旅』がシメオンの見聞録であること、自分が府主教イシドールから疎まれ、彼の下から大ノヴゴロドに逃げ出し、大主教エウフィミー二世(在位一四三五―一五八八年)の下で『会議と旅』を作成したことを述べた後、最後に敬虔なる大公ヴァシーリー二世によりルーシの地の正教が堅固にされたことを称えている。^①

導入部が終わると、会議そのものについての叙述が進む。各地からフエラーラに参加者が集まった後、会議が開始された。エフェソスのマルコス、ニカイアのベツサリオン、ルーシのイシドールがそれぞれ、アレクサンドリア、アンティオキア、イエルサレムの正教総主教の代理人であると認められ、全地公會議の体裁が整えられた。何故イシドールがこうした荣誉ある役割を任されたのか。これについてシメオンは、ルーシではキリスト教が著しく際だって称賛されているからと述べている。会議は四回目の会合で上記のマルコスがカトリック批判を行ったことで以後紛糾し、教皇、枢機卿、大司教を始めとするカトリック側の聖職者は退席する。シメオンには目前で起こったことが理解できず、彼は丁度隣に座っていたイエルサレム近郊の府主教ドロテオスに進行中の状況を尋ねている。議場に残ったのはギリシア人だけで

あった。こうした事態を引き起こしたマルコスに皇帝ヨハネスは苦言を呈すが、それに対しマルコスは教皇が教会を一つにすべきであるとして会議を持ちかけてきたのに、実際には正教的な儀礼等をやめ、教皇の下に入るものが議論されているのではないかと反論する。このようにして第四回目の会合は散会する。^②

その後カトリック側は金品攻勢に出た。枢機卿や大司教たちが皇帝や総主教のもとに個別に訪れ、彼らが帰国せぬように金銀を渡そうとしていた。マルコスは、もし受け取ったならばそれは不名誉に値し、その者はもはやキリスト教徒ではないと警告する。しかし皇帝はこれを受け取った。教皇はマルコスにも狙いを定めたが、こちらは失敗に終わった。皇帝は更に金銀を約束され、会議の場を一段とローマに近いフィレンツェに移すという提案を受け入れる。彼らは苦勞して山を越え、フィレンツェに入ったが教皇は約束を反故にし、彼らはそこでマルコスの戒めを想起する。^③

こうしてフィレンツェにて会議が再開されるが、依然としてマルコスが合同に反対しており、彼には二人の府主教が同調した。こうした中で高齢のコンスタンティノープル総主教ヨシフ(在位一四一六―一三九九年)が死去する。^④

しびれを切らした教皇はマルコス以下合同に反対する府主教たちとの直接交渉に入る。教皇の使者は一切マルコスを諍ることなく、荣誉を以て彼を迎え入れる準備がある旨を伝えようとするが、マルコスはこれを門前払いにした。教皇使節であるフィレンツェの大修道院長アンブロシウスの場合、彼がマルコスを非難した途端、息が絶えたとい

う。そこでマルコス抜きで会議が再開される。教皇が入場すると、先に議場に入っていたカトリックの聖職者が、そして皇帝を始め多くのギリシア人も教皇に拝礼し、殆どの者が合同文書に署名した(一四三九年七月六日)。モスクワの府主教イシドールも署名した。合同に反対の意を表明したスズダリ大主教アヴラーミーは、教皇から派遣された司教クリストフォロスとイシドールにより投獄され、一週間後に署名を強要された。そしてイシドールらモスクワの代表団は帰国の途に着く。^⑤

彼らはヴェネツィアに到着するが、この時にシメオンはフォマという名のトヴェリ人と共に一団から抜け出し(二月九日)、一四四〇年の春にノヴゴロドに到着し、ノヴゴロド大主教エウフィミー二世のもとで『会議と旅』の執筆に着手する。この時、スモレンスクからユリー・セミヨノヴィチ公がノヴゴロドに来る(一四四〇年末)。実は彼は別ルートでスモレンスクに辿り着いたイシドールからノヴゴロドに派遣されたのであった。シメオンはスモレンスクには正教徒がいるというユリー公の言葉を信じてスモレンスクに移る。だがそこでシメオンはイシドールに引き渡され、枷をはめられたまま一冬を牢獄で過ごす。その後、イシドールがモスクワ入り(一四四一年)した際に彼は随行させられた。入市後、イシドールはモスクワのウスペンスキー聖堂において典礼を行い、冒頭で教皇の名を挙げることを指示したが、敬虔なる大公はそれに同意しなかったという。^⑥

その後、信仰を固め、「ギリシアの信仰」を守り、他方でローマ教皇やその「弟子」イシドールを「七つの公会議」やギリシアの信仰か

ら排除した大公ヴァシーリーへの頌詞で『会議と旅』は締め括られる。^⑦ その最後では、ウスペンスキー聖堂から異端であるイシドールを追いついたことでヴァシーリーが称えられ、またラテンの異端により盲目にされたとして皇帝ヨハネスが非難されている。^⑧ シメオンの運命については何も記されていない。

この『会議と旅』はいかなる状況で成立したのか。この著述のなかでシメオン自身は、上述のように、ノヴゴロドに寄留していた時にこの著述を作成したと記している。しかし、既に見たように、シメオンはその後の経緯を、すなわちモスクワのウスペンスキー聖堂からのイシドールの追放までを記しており、また最後にはイシドールを以前の府主教と呼んでいるので、彼が廃位された後に『会議と旅』が成立したと考えられる。

では具体的な時期はいつか。代表的な論者であるJ・B・チエレブニンの説を挙げておこう。

彼によれば、シメオンはヴァシーリー二世を大公と呼んでいるが、ヴァシーリーが内戦期に捕虜とされ、一四四七年にモスクワに戻ったことを考慮するならば、それ以降にならないと『会議と旅』は成立しないと考えられるという。一四四六年には彼の敵であるドミートリー・シェミヤカがモスクワに君臨しており、ヴァシーリーは目を潰された上でウグリチに配流されていた。また大公が盲目にされるに当たり、帰国後のシメオンが生活していたトロイツェ・セルギエフ修道院の長老がそれに関与していた。つまりシメオンは大公が盲目にされたことを修道院において生々しく聞いていたので、そうした彼がヴァシーリー

「へ頌詞を送るとは考えにくいとする。言うまでもなく、失明は政治生命の喪失を意味したからである。また一四四五年にも成立はあり得ないという。この年、ヴァシーリーはスズダリ近郊の合戦でタタルに敗れ、捕虜になった。こうした姿も、『会議と旅』の末尾部に描かれる力強いヴァシーリー像とは相容れないという。また彼は、『会議と旅』において、当時大公は若かったことに数度言及されていることを指摘した。^⑤つまり、これは『会議と旅』の成立が実際の会議から時を経ていることを示唆するという。このように、チェレプニン^⑥は、末尾でヴァシーリー二世を称える『会議と旅』は、彼が宿敵ドミートリ・シエミヤカに勝利し、モスクワに凱旋した一四四七年までは成立し得ないと考えた。その一方でこの『会議と旅』は、ルーシ教会の自立にとつて重要な出来事であるヨナの府主教選出（一四四八年）に言及していない。従って、『会議と旅』は一四四七―四八年に成立したという。^⑦

以上の意見は比較的近年まで受け入れられていたが、これを批判したのがシニツィナである。彼女は、第一に「大公が若かった」とする言葉が使用されている文脈を検討した。具体的にみてみよう。

大公が若かったとする言葉は、実はシメオンばかりか、彼が引用したイシドールの言葉においても使用されている。『会議と旅』において、イシドールは、若さという言葉を教皇に向かって、大公がまだ若いので、彼をローマの方に向かせることはたやすい、という文脈で使っている。またシメオン自身の場合、彼は、大公がまだ若いにも拘わらず理解力に優れている、という文脈で大公の若さに言及している。こう

した状況に鑑み、シニツィナは、以上の文脈で利用されている大公の若さに関する情報^⑧は、『会議と旅』の成立年代を定める徴にならないと考えた。筆者も彼女の意見に賛同する。ここでの若さは、書かれた時点から見て、当時大公がまだ若かったというようには理解しがたい。従つてこの言葉は、『会議と旅』の成立時期の確定には役立たない。

また第二に、一四四七年以前にはヴァシーリー二世への頌詞は作成されないとする意見に対し、彼女は、「一四四一年でもあり得るではないか」と反論する。^⑨シニツィナの述べるところは判然としないが、シメオンらの帰還時に大公はヴァシーリー二世であったのであるから、彼へ頌詞は一四四七年まで待たずとも成立し得たと述べているのだと思われる。

では結局のところ、『会議と旅』はいつ成立したのだろうか。シニツィナは次のことを重要視した。第一に、『会議と旅』がイシドールの追放記事で終わっていることである。『会議と旅』はイシドールの続く運命には言及していない。第二に、ここでのイシドールの描き方は、一四四一年に大公ヴァシーリー二世がコンスタンティノープル総主教ミトロファネス二世（在位一四四〇―四三年）に宛てた書簡と類似しているという。^⑩

筆者の考えでは、シニツィナの最終的結論は受け入れられる。特に重要なのは、『会議と旅』がイシドールの「追放」で終わっていることである。仮に後代に成立したとすれば、イシドールが「追放」後にローマに辿り着いたこと等が記されたことだろう。従つて、イシドールの追放後の比較的早い時期にシメオンは『会議と旅』を作成したと

十分に考えられる。但し、シニツィナはイシドールの「追放」後というのを、モスクワからの「追放」後と考えているが、あくまで『会議と旅』においては、ウスペンスキー聖堂からの追い立てまでしか描かれていないことに注意すべきである。¹⁵

尚、『会議と旅』においては、これがノヴゴロドにおいて書かれたと述べられている。¹⁶ 筆者の考えでは、ノヴゴロドに寄留中に書かれたテキストが冒頭部分には残されている可能性がある。仮に、そこで書かれたテキストが失われ、その後、モスクワで新たに最初から書き始められたならば、「ノヴゴロドで書いた」とする冒頭部は、当然、書き直されただろう。但し具体的なテキストについては、それを示唆するものはあるとは言え、判然としているわけではない。¹⁷

この冒頭部を考察すると、シメオンはこの『会議と旅』を、おのが体験記、見聞録と位置づけていたと考えられる。冒頭だけでこのことが二度繰り返されている。¹⁸

このように『会議と旅』を検討した上で、この著述において、大公ヴァシーリーやルーシへの賞賛はあれ、また皇帝ヨハネスやイシドールに対する非難はあれ、モスクワの自立を意識させる言い回しは皆無であることに注目せざるを得ない。例えば、シメオンは大公をキリスト教的な意味でのツァーリと呼んだり、正教の盟主と呼ぶことはしない。

さて、このテキストが作成された状況は以上のように考えられるが、他方でこれは現実の状況にいかなる影響を及ぼしたのだろうか。この問いに答えることは困難だが、恐らくは、このテキスト自体は殆ど影響を及ぼさなかったと思われる。というのも、以下で見るように、『会

議と旅』はすぐに若干の改訂を受けるからである。従って、この私的な見聞録としての性格が色濃い『会議と旅』が、どのように改訂されたのか、そこでの会議観はどう変わったのかを検討することが次の課題になる。そのことにより、『会議と旅』の特色もより明確になる。

(二) 『シメオンの話』の成立

『会議と旅』の成立後、シメオンはこれに手を加え、『スズダリ人修道司祭シメオンの話。ローマ教皇エウゲニウスがその同志と共にいかに第八会議を開いたか』(以下『シメオンの話』)を作りあげた。¹⁹ 一六世紀以来の研究は、この『シメオンの話』が『会議と旅』の内容を部分的に補足・削除して成立したことを明らかにしている。例えば、A・C・パヴロフは、『シメオンの話』では、『会議と旅』から①イシドールの随行者であった掌院ヴァシアンの名前が削られたこと、②シメオンが自分を使節団の告解士であるとする記事が削除されたこと、③登場するギリシア人の名前がロシア風に書き改められている点(グレゴリオスがグリゴリーに、等)を挙げた。その一方で、④会議の歴史的背景に言及がなされ、⑤イシドールが「ラテンの出身」と呼ばれ、⑥幾つかの写本ではイシドールがモスクワを発った後、コンスタンティノープル経由でフェラーラ入りしたとされている。また⑦一部の写本には、合同に反対した府主教達の末路が記されているという。²⁰ B・H・マリニンは、『会議と旅』と『シメオンの話』には内容に関して本質的な変化を認めないものの、後者ではルーシの立場が上昇していること、またギリシア人全員が合同に賛成していたわけではなく、モスク

ワは東方の正教徒と不安を共有すべきであると記されたことを指摘した。⁽²¹⁾

以上の研究を踏まえながらシニツィナは、『シメオンの話』において出現した全体的な新傾向を以下の二点にまとめている。すなわち第一に、上述のように、ルーシの地位が更に上昇している。ルーシの使節を会議が半年間も待っていたという状況が新たに記されている。⁽²²⁾第二に、ギリシア人批判が著しく緩和されている。彼らの活動は、背後に迫るトルコに対する援助をカトリックから引き出そうとする方策に基づいており、やむを得ぬものであったと考えられている。⁽²³⁾

また彼女は、重要な改訂点として、以下の三点にも注目している。すなわち(一)冒頭における前史の挿入。(二)教皇からヴァシーリー二世に宛てた勅書の存在についての言及。(三)イシドールの追放の際に、『会議と旅』ではイシドールだけだったのが、『話』ではイシドールに加えて「彼の同志」も追放されたとの書き入れ、である。⁽²⁴⁾シニツィナは『シメオンの話』の特徴をこのように列挙したが、彼女自身が断っているように、これに詳細に言及しているわけではないので、本稿では詳しくこれに留まってみよう。

まず、全体的な物語構成について言えば、それは基本的には『会議と旅』と同じであると言えるが、テキストをそのまま引き継いでいる箇所は希で、一文一文に詳細に手が増えられている。

また、『会議と旅』から幾つかの大きな変更が加わった。

一、既に指摘されてきたように、冒頭部が全く変更された。『会議と旅』にあった、会議の署名を拒絶した四人のギリシア人府主教への

賛辞や出席者の紹介、またノヴゴロドで書かれたとする執筆状況の説明の代わりに、会議に至るまでのビザンツとローマ教皇とのやりとり、トルコ人による帝国攻略の状況、その援助を目的とした教皇による会議開催の決定、ビザンツ皇帝と総主教による会議への参加を要請する勅書のモスクワへの送付、モスクワにおけるその検討の場面が書き込まれた。そして大公ヴァシーリーはイシドールに対し、正教を裏切らないことを確約させて出発を認める。そうした冒頭部でこの『シメオンの話』は始まっている。『会議と旅』では冒頭と本体でストーリーが部分的に繰り返されていたので、これが解消され、代わって会議の前史が増えられているわけである。⁽²⁵⁾

二、その後、基本的には『会議と旅』と同じストーリーが続くが、所々に興味深い変更が増えられている。例えば、モスクワが正教世界において非常に権威を有している状況が強調されており、教皇や皇帝、総主教は、それ故にイシドールが率いるモスクワ使節団を半年も待ったと書き加えられている。⁽²⁶⁾また臨場感を出すためか、会議の場への両陣営の入場の様子、そして着席後の配置が書き入れられた。⁽²⁷⁾加えて、会議でのマルコスの発言に幾人かの府主教が賛同の声を上げたことが記された。⁽²⁸⁾

また会議中断後のカトリック側からの金銭攻撃の叙述が増やされた。⁽²⁹⁾そして皇帝が魅了された一因としてイシドールの役割が強調された。⁽³⁰⁾

またフィレンツェの町の情景が追記された。⁽³¹⁾

合同への署名の場面においては、シメオン自身は誘惑されず、何に

も従わなかったことが追記された。そしてそのことで彼がマルコスから祝福を受けたことも書き加えられた。⁽³³⁾ 他方で皇帝ヨハネスとイシドールは異端であり、ギリシア人一般も銀を好む人々と記された。⁽³⁴⁾

また、イシドール帰国時に、ヴァシーリーは既にイシドールの誘惑を知っていたかのような記述にされた。⁽³⁵⁾

そして本体部分の末尾において、イシドールの解任について述べられた後、彼が異端であると呼ばれ、その彼が、ウスペンスキー聖堂からではなく、モスクワの町から追放されたと記された。⁽³⁶⁾ 尚、異端（或いは異端者）の語は、『会議と旅』では三カ所しか使用されていなかったが、『シメオンの話』では九カ所に増えている。そして、イシドールだけでなく、「彼の同志」も追放されたと書き加えられた。⁽³⁷⁾

三、イシドールの追放が語られた後、『会議と旅』と同じく、大公ヴァシーリーに向けられた頌詞が続く。但し、これは『会議と旅』のそれと比べ、多くの場合に内容が省略されている。逆に追加された部分が二カ所ある。冒頭では、教皇から送られてきた異端である彼の追放と呪詛を皆が喜んでいる様子が書き入れられた。そして頌詞の最後では、イシドールとその同志への呪詛の言葉が追記された。⁽³⁸⁾

四、また削除された点がある。それは、各地から会議に人が集まったとする記事、またドロテオスのそばで、カトリックの聖職者の退出場面をシメオンが目撃したとする記事である。

さて、この『シメオンの話』の成立時期の問題から考えよう。シニツィナは、その最後に登場するイシドールの「同志」を、具体的に、彼の弟子グリゴリーであると考えている。そしてこの「同志」とい

う語が改訂時に出現したことを根拠にして、『シメオンの話』が、この弟子がカトリック教会の息のかかった府主教としてキエフに出現した一四五八―六〇年頃に作成された可能性を指摘する。⁽³⁹⁾

しかし、彼女自身も、またこれまでの多くの研究者もまた考えてきたように、やはりヨナの選出にこの『シメオンの話』が言及していないという点が重要である。末尾にて正教とヴァシーリーへの頌詞を持ち、また正教はルーシにおいて生き長らえていると考える『シメオンの話』がヨナの選出に言及しないという状況は、この話がヨナの選出前に、つまり一四四八年以前に成立したと考えるための決定的な論拠になる。

シニツィナ以外で『シメオンの話』の出現時期について具体的に述べているのは、それを『会議と旅』の成立直後とする H・A・カザコヴァだけである。⁽⁴⁰⁾ 但し、彼女は論拠を述べていない。両者の類似性がその根拠になっているように思われる。筆者は、『シメオンの話』がまさにイシドールの「追放」で話を終えていることを考慮し、カザコヴァ説を採りたい。『話』はイシドールの「追放」後すぐ（一四四一年）に成立したと考えられる。

また著者については、かつては『シメオンの話』はシメオンの手になるとされたが、近年の研究では、この『話』は既にシメオンの手を離れ、モスクワの文筆家たちの手になるとされる。⁽⁴¹⁾ しかし、この点については、シニツィナが的確に指摘するように、誰も論拠を挙げていない。⁽⁴²⁾ 特にシメオンでないとする理由がない以上、本稿では表題に従ってこの著者をシメオンと考えたい。

ここまで見てきたように、諸研究は全体として『シメオンの話』にあまり関心を有していない。先行する『会議と旅』と「本質的に変わらない」この『話』は、例えばチェレプニンの論文では、全く考察に値しなかった。

しかし、筆者の考えでは、それでも『シメオンの話』の成立状況を探るべきであり、またそれを考察する材料は多からず存在する。シメオンの自己正当化と取れる文章が『シメオンの話』に新たに書き加えられていることが、この『話』の成立状況を探るために重要である。

ポポーフ以来の研究が明らかにしたように、『聖セルギー伝』の一部の版（「バホーミー版」）の更に一部の写本には、『ラテンの国々にいた聖職者と人々について』というまさにシメオンに関する話が挿入されている。それによると、シメオンは、イシドールのモスクワ追放後すぐに解放されたわけではなく、トロイツェ・セルギエフ修道院の院長ジノヴィーに引き渡された。もちろんこれは、枷をはめられての投獄ではなかったが、デレクトルスキーが考えたように、一時的であれシメオンが大公や教会聖職者により、合同賛成派ではないかと疑われたと考える論拠になる。

セルギエフ修道院における彼のそうした境遇こそが、まさに彼をして会議における活動を正当化させしめたのではないか。会議においてイシドールに屈服せず、「正教を守った」エフェソスのマルコスから直々に祝福を受けたとする記述、自分はカトリックから何も受け取らなかったとする記述が新たに挿入された。つまり『シメオンの話』は自己の行為を改めて正当化しているのである。そうした時期はいつか。

『シメオンの話』が会議直後に成立したという上述の意見も考慮するなら、ここではそれを彼がセルギエフ修道院に軟禁されていた時期に求めることは自然であろう。

このように考えるとき、『シメオンの話』における「異端」という語の増加には注意が必要である。これまでこれは単にラテンに対する反感の増大と考えられてきた。しかし上記の状況を考慮するとき、この語の増加は、自分の行為を正当化し、他方で合同署名者を対比的に記そうとするシメオンの志向の反映と考えられる。少なくともモスクワにおける一般的な反感の増加を反映しているとは考えにくい。

このように、『シメオンの話』は、『会議と旅』と同じく、会議の経緯を描いているものの、その一方で、修道司祭シメオンのまさに弁明の書という新たな性格を帯びたと考えられるのである。だからこそ、シニツィナが指摘したように、『会議と旅』に比べて『シメオンの話』では合同におけるイシドールの役割が強調され、彼への呪詛の言葉が加わり、彼が異端であると記されているように思われる。

見聞録としての性格が強い『会議と旅』は、事実関係を詳細に記していたものの、シメオン自身の立場を全く正当化していなかった。それ故に、彼はトロイツェ・セルギエフ修道院に「軟禁」された際、自分の立場を正当化し、それと共にイシドールこそが異端であり、彼を悪役として描くことに努めた。この修道院においてこの著述は残り、恐らくその一部は『聖セルギー伝』で利用されたのだろう。

こうした『シメオンの話』では、確かに大公やルーシの地位は上昇させられている。しかし、やはり『会議と旅』と同じく、ビザンツと

袂を分かち、或いは独立を目指すといった方向で話は進んでいない。むしろ、ビザンツの窮状に理解を示し、加えてギリシア人一般を批判の対象から外し、批判をイシドールと皇帝ヨハネス個人に集中させている。そうすることで、全体としてビザンツと縁を切ろうとする志向は『会議と旅』よりも弱まっていると言わざるを得ない。

会議直後には以上の如き会議観が存在していた。そこに描かれる内容は、まさにこの時期の政治史の研究が導き出す理解に一致している。次章で見るように、その後『シメオンの話』は一四六一―六二二年に大きく改訂されるものの、それまではシメオンの著述は彼の私的な体験を綴った私文書であり続けたのである。

注

- (1) *Милин, Старец Елеазарова монастыря*, С. 89-90.
- (2) *Милин, Старец Елеазарова монастыря*, С. 92-93.
- (3) *Милин, Старец Елеазарова монастыря*, С. 93-95.
- (4) *Милин, Старец Елеазарова монастыря*, С. 95.
- (5) *Милин, Старец Елеазарова монастыря*, С. 96-97.
- (6) *Милин, Старец Елеазарова монастыря*, С. 97-99.
- (7) *Милин, Старец Елеазарова монастыря*, С. 99-101.
- (8) *Милин, Старец Елеазарова монастыря*, С. 101.
- (9) この点には既に「レクトールスキー」により指摘されている。⁹ *Делекторский, Критико-библиографический обзор*, С. 140.
- (10) *Черепнин, К вопросу*, С. 178-179.
- (11) *Казанова Н. А. Западная Европа в русской письменности XV-XVI веков*. Л., 1980, С. 64-65; *Словарь книжников и книжности Древней Руси* (СПб.). Вторая половина XIV-XVI в. ч. 1, Л., 1989, С. 335.

- (12) *Синицына, Третий Рим*, С. 80.
- (13) *Синицына, Третий Рим*, С. 81.
- (14) *Синицына, Третий Рим*, С. 80.
- (15) *Милин, Старец Елеазарова монастыря*, С. 100.
- (16) *Милин, Старец Елеазарова монастыря*, С. 89.
- (17) この冒頭部の後半には興味深い一文がある。シメオンが「私は、

神により救われた大ノヴゴロドの町の、聖なる導師〔大主教への尊称〕エウフィミーのところに通り着き、見聞きしたことを書いた。フランク〔イタリア〕の地で、フィレンツェの町で何が生じたか。ルーシの地で何が生じたか。モスクワで何が生じたか。そこではギリシア皇帝ヨハネス、銀を好むギリシア人たち、府主教徒たちにより悪が生じたが、ここモスクワでは、正教により、キリストに愛された大公ヴァシーリー〔二世〕・ヴァシリエヴィチによりルーシの地は堅固にされた」という一文である。まず、まだモスクワに到着していないシメオンがモスクワで生じた出来事について書くことは出来ないので、このでの「ルーシの地で何が生じたか。モスクワで何が生じたか。」を挿入と考えるべきである。加えて後半でシメオンは「悪が生じた地」と「正教が堅固にされたモスクワ」とを対比させているが、上で挙げたテキストでは、「悪が生じた地」に、「ルーシもモスクワも入ってしまったている。しかし、上述のように、「ルーシの地で何が生じたか。モスクワで何が生じたか。」を後代の挿入であると考えらるなら問題は生じない。またその後の対比についても、まだモスクワに着いていないシメオンが「ここモスクワ」と記するのは矛盾しており、この箇所も、恐らくシメオン自身により、モスクワに到着後に記されたと考えられる。

- (18) *Милин, Старец Елеазарова монастыря*, С. 89.
- (19) ポポフはこの版こそが他よりもオリジナルに近いと述べたがそれは正しくない。既にバヴロフに始まる研究者が反論を加えている。¹⁰ *Попов, Историко-литературный обзор*, С. 337; *Попов, Критические*

- опыты, С. 102-105; *Делекторский*, Критико-библиографический обзор, С. 166, *Малинин*, Старец Елеазарова монастыря, С. 447.
- (20) *Павлов*, Критические опыты, С. 103-105.
- (21) *Малинин*, Старец Елеазарова монастыря, С. 454, 458.
- (22) *Синицына*, Третий Рим, С. 83.
- (23) *Синицына*, Третий Рим, С. 83.
- (24) *Синицына*, Третий Рим, С. 84.
- (25) *Помоев*, Историко-литературный обзор, С. 344-345.
- (26) *Помоев*, Историко-литературный обзор, С. 345.
- (27) *Помоев*, Историко-литературный обзор, С. 345-346.
- (28) *Помоев*, Историко-литературный обзор, С. 347.
- (29) *Помоев*, Историко-литературный обзор, С. 349.
- (30) *Помоев*, Историко-литературный обзор, С. 350-351.
- (31) *Помоев*, Историко-литературный обзор, С. 351.
- (32) *Помоев*, Историко-литературный обзор, С. 354.
- (33) *Помоев*, Историко-литературный обзор, С. 355.
- (34) *Помоев*, Историко-литературный обзор, С. 356.
- (35) *Помоев*, Историко-литературный обзор, С. 357.
- (36) *Помоев*, Историко-литературный обзор, С. 358.
- (37) *Помоев*, Историко-литературный обзор, С. 358-359.
- (38) *Синицына*, Третий Рим, С. 84.
- (39) *Казакоев*, Западная Европа, С. 66; СДЛ. Вторая половина XIV-XVI в. ч. 2, С. 335; *Синицына*, Третий Рим, С. 84.
- (40) *Казакоев*, Западная Европа, С. 66.
- (41) *Делекторский*, Критико-библиографический обзор, С. 165; *Казакоев*, Западная Европа, С. 66; СДЛ. Вторая половина XIV-XVI в. ч. 2, С. 335.
- (42) *Синицына*, Третий Рим, С. 84.
- (43) *Черепнин*, К вопросу, С. 176-187.
- (44) *Помоев*, Историко-литературный обзор, С. 343.
- (45) *Делекторский*, Критико-библиографический обзор, С. 142.

二 ローマからの府主教グリゴリーの到来

— それに対するモスクワ教会独立及び

フェオドーシー選出の正当化 (一四六一—六二年) —

モスクワからの逃亡後、今やカトリックの枢機卿であったイシドールは一四五八年に、その弟子にして教会合同派であるグリゴリーを「キエフと全ルーシの府主教」に叙任させることに成功した。彼のロシアニアへの到来が、以下に見るように、フェラーラ・フィレンツェ会議の展開に大きく作用した。

(一) 『ラテン人に対する話』の諸版の相互関係

その最初の作用が、『シメオンの話』の改訂である。その結果、上述の『ラテン人に対する話』が成立した。

尚、予め述べておくと、若干の年代記にも、この『ラテン人に対する話』と多くの部分でテクスト的に一致した『話』が含まれている。大まかな構成は次の通りである。

① 個別版の『ラテン人に対する話』

フェラーラ・フィレンツェ会議に関する話

+ 府主教ヨナ選出の話

＋ローマからの府主教グリゴリーの到着およびその拒絶、新府主教フェオドーシー選出の話

②年代記版(話を掲載する年代記の中で最古のものである一四七九年の大公年代記集成の場合)^①の『ラテン人に対する話』

フェラーラ・フィレンツェ会議に関する話(のみ)

この二つの版の関係について言えば、長い間支配的であったルリエーの見解によると、個別版が先行して一四六〇―一六一年頃に、『シメオンの話』を基にして作成された。その後、会議に関して伝える前半部分だけが年代記に入ったという。その他の部分は全く年代記に挿入されなかった。年代記版は最古のものが一四七九年の大公年代記集成に含まれるものであり、それに先行する大公集成なる一四七二年集成(ニカノロフ年代記などで伝来)にはそれが含まれていなかった。そのことを重視し、ルリエーは、七〇年代末に初めて『話』は年代記に入ったとする^②。

また予め述べておくと、年代記版にも、一四七九年の大公年代記集成に含まれる版(『大公年代記版』)と、ソフィア第二年代記やリヴオフ年代記に含まれる版(『ソフィア版』)が、つまり二つの版が存在する。後者の場合、構成は個別版と同じである。すなわちヨナ選出以降にも言及している。但し個別版に比べて多くの追記がなされている。ルリエーによれば、ソフィア版は大公年代記版に基づいて作成された^③。細かい点については後述する。

さて個別版と大公年代記版、そしてソフィア版との関係に関するルリエーの上述の意見は、近年のシニツィナの研究において批判を蒙った。彼女は、その際、個別版、大公年代記版、ソフィア版の他に、上記の三つの版全てが部分的に引用している一四六〇年の府主教ヨナの書簡という四史料の相関関係を改めて検討した。

比較の際に彼女が第一に重視するのは、テキストの直接的な引用関係ではなく、四文書の物語構造である。具体的に言えば、まず個別版、ソフィア版、そしてヨナ書簡では、①会議、②ヨナ選出、③グリゴリーの拒絶という年代的順序で一致して物語が語られている^④。上述のように、大公年代記版は①しか含んでいない。また、ソフィア版にせよ、大公年代記版にせよ、年代記テキスト中で『話』は明らかに後代の挿入である。なぜなら会議に関する両年代記版の『話』は、例えば一四四一年のイシドールの「追放」にも言及しているにも拘わらず、一四三八―三九年の年次記事の枠内に含まれており、加えて、例えば一四四〇年及び四一年の記事では、再度、通常の年代記叙述の如き簡潔な、イシドールのローマからの帰還と逮捕、脱獄に関する記事(「府主教イシドールについて。彼がどのようにローマからモスクワに来たか。」「府主教イシドールについて。彼がどのようにモスクワから逃亡したかについて。」)が繰り返されているからである^⑤。そしてその場合、個別版、ソフィア版、そしてヨナ書簡は同じ物語構造を持っていることになる。従って、これら全ては共通の先行史料に遡るとシニツィナは考えたのである。

こうした意見を彼女は、まずは③グリゴリーの拒絶に関する部分

について、上記三つの版を比較することで裏付けようとする。この部分において、ソフィア版と個別版は次の構造を有している。⁽⁶⁾

個別版

(a) 追放後のイシドールのローマでの活動、グリゴリー⁽⁷⁾の選出、ルーシへの派遣

(b) 東西教会分裂の歴史

(c) グリゴリーを受け入れるようにとのリトアニア大公の使節による大公ヴァシーリーの説得、そしてその拒絶

ソフィア版

(a) 追放後のイシドールのローマでの活動、グリゴリーの選出、ルーシへの派遣

(b) リトアニア大公カジミェラス宛ての教皇ピウス二世の勅書

(c) グリゴリーを受け入れるようにとのリトアニア大公の使節による大公ヴァシーリーの説得、そしてその拒絶

以上の構造を比較して、シニツィナは、元々(a)と(c)が一体となっていたのが、個別版とソフィア版では異なるもの(b)が後に挿入されたと考えた。それを裏付けするのがヨナ書簡である。この書簡は構造的に、(a)と(c)からなっている。従って、元々は構造的には(a)と(c)からなる、ヨナ書簡型の先行史料が存在したというのである。⁽⁷⁾

シニツィナは、③の部分に関して、以上の結論を出す、筆者の考えでは既にこの段階で彼女の主張は重大な問題を抱えている。とりわけ、テキストを比較してみると一目瞭然なのだが、個別版とソフィア版については、上述の(a)と(c)に関して、確かに大部分がテキスト的に一致する。しかし両者は確かに構造的にはヨナ書簡と一致するものの、テキスト的な継承関係は殆どない。この点は無視できない。

この議論の際に、シニツィナは構造の一致に着目するが、フェラーラ・フィレンツェ会議に関する話、府主教ヨナ選出の話、ローマからの府主教グリゴリーの到着およびその拒絶、新府主教フェオドーシイ選出の話は元々時系列に並んでおり、どの史料においても並びは一緒であるという事実は不思議ではない。だが、テキスト的關係に焦点を絞るなら、『ラテン人に対する話』とヨナ書簡とのそれは極めて薄いと言わざるを得ない。

このように考えられるので、これまでの伝統的見解であるルリエーの意見を土台にした方がむしろ説得力がある。すなわち、繰り返しになるが、まずは個別版の『ラテン人に対する話』が成立し、次いで、大公年代記版、そしてある時点でソフィア版が成立したと。但し、シニツィナは、細部においては重要な意見を述べているので、それには当該箇所而言及される。

(二)『ラテン人に対する話』の概要と改訂点

まずはその概要を述べておこう。『ラテン人に対する話』は、上述のように、大まかには二部構成になっている。第一部はまさに『シメ

オンの話』の改訂版であり、フェラーラ・フイレンツェ会議に関する叙述である。新たに生じた第二部は、ヨナの選出の話に始まり、イシドールの弟子であるグリゴリーの拒絶と新府主教フェオドーシイの任命、そして大公ヴァシーリー二世への頌詞で終わっている。

この『ラテン人に対する話』の成立状況に関しては、かつてポボーフが、これがイシドールの文書や上記『シメオンの話』等からのラテン人非難をまとめ上げたものであり、一四六一年頃に主教の一人により作成されたと述べた。成立年代の根拠は、そこでは一四六一年のフェオドーシイの叙任が記され、またヴァシーリーがまだ存命中であることにある。^⑧この成立年代にはその後の研究者も同意している。しかし作成者と成立状況に関してはその後も論争が続いている。

パヴロフは、フェオドーシイの選出こそがまさにルーシ教会の独立の証しなのであり、それ故にこの「勝利」が『ラテン人に対する話』に反映しているとす。^⑨

またその作成者は、当時モスクワにいた有名な聖者伝作家パホーミ・セルプ以外にないとする。^⑩その根拠としてパヴロフが挙げるのは、①シメオンとパホーミはセルギエフ修道院に同時期に滞在していたこと、②後に彼が作成した『聖セルギー伝』に、シメオンがヴェネツィアから逃亡した時に奇蹟が生じ、セルギーが現れたとする話がある。これは、シメオンからパホーミが聞き出したことと考えられ、従って、パホーミは『ラテン人に対する話』の作者として相応しいとする。また③当時のルーシの文筆家は大公をツァーリとは呼ばなかったが、『ラテン人に対する話』では大公はツァーリと呼ばれている。こ

れは、作者がルーシ人ではないことを示唆するという。^⑪だが、こうした根拠は、潜在的な可能性を示唆するものの、直接的な論拠ではない。例えば、『会議と旅』でもツァーリと呼ぶ事例がある。^⑫

これに対しては、『ラテン人に対する話』もまたシメオンの著作であるとするデレクトルスキーの批判がある。彼もまた、『話』が新府主教選出の正当化のために作成されたと考えるが、但しその著者に関する主張は少々説得力に乏しい。すなわち、こうした正当化のために会議について述べることでできたのはシメオンを除いて他にいないと消去法的に考える。^⑬ただ、上述のように、改訂作業は会議の参加者である必要はなく、また逆に、参加者こそが知っている事実が追加された様子もない。更にはこの時期にシメオンが存命していたのさえ判然しない中で、彼を選ぶのはやや難があるように思われる。

それ以外にデレクトルスキーは、以前の『シメオンの話』の内容と比較しながら、『ラテン人に対する話』のその特徴を論じた。すなわち、後者は公的な文書であり、美辞麗句が散りばめられていること、またモスクワにおける大公とイシドールの対話から始まっていること、ここでは大公がイシドールの会議入りに反対していたことが新たに書き込まれたとする。また以下の改訂点が挙げられた。会議に向かう途中に逗留したユーリエフにおいてイシドールがなした正教に対する裏切りとカトリックの教会堂での典札についての話が挿入された。またモスクワ帰還までのイシドールの足取りが詳細にされた。またイシドールと教皇の書簡の全テキストが掲載された。また『シメオンの話』には存在したが改訂の際に削除された部分もあり、例えば私的性質の記

述（府主教ドロテオスとの会話）がそれである。またマルコス言葉が簡潔にまとめられている場合もある。他方で、後半部でシメオンは編者ではなく著者であり、ヨナとフェオドーシーの選出や、正教会からのラテン人の追い立てについて書き下ろしたという。府主教二人の選出について言えば、ヨナについては記憶に基づき、またフェオドーシーについては現在の出来事として著述したとする。他方で、ラテン人の追い立てに関しては、一五世紀初頭の集成で伝わる類似タイトルの「ラテン人の話」やニケタスの著述からの引用が多くを占めている。この「話」とニケタスの著述を同時に伝える写本があるので、デレクトルスキーは、この写本が『ラテン人に対する話』作成時にシメオンの手許にあったと仮定している。¹⁵

他方でB・ヴァリデンベルクは、『ラテン人に対する話』が有する別の側面に言及した。すなわちこの『話』がモスクワ大公を称えている点である。大公はイシドールを追放したと記され（実際にはそうではなく、イシドールは脱獄、逃亡した）、また大公ヴァシーリーはコンスタンティヌス帝やキエフ大公ウラジミール、使徒と並び称されている。この点はルリエーによっても指摘された。¹⁶

シニツィナは、上記の大公への賞賛の他にも次の点に注目した。すなわち大公の賞賛の際に称号が変化した。「全地的」用語が利用された。具体的にはヴァシーリーは多くの場合ツァーリの称号で呼ばれており、加えて、ルーシ的な父称が使用されなくなった。またルーシの地も称揚されるようになった。また、使徒の使命の継続が彼の課題とされた。¹⁷

他方で彼女は、ギリシア人批判が更に弱まっていることも指摘している。問題にされたのは会議の参加者と皇帝だけである。ただ、これも全体としては弱まっているとする。他方で教皇とイシドール批判は強められているという。¹⁸

筆者も基本的には上記の意見には賛同する。しかし、これまでの研究はあまりに概括的に『シメオンの話』から『ラテン人に対する話』の変化を論じてきた。そこで第一に、本節では変化を詳細に見てみたい。また第二に、上述の研究者たちの着目点は興味深いものの、その意味については、踏み込んで述べられていないように考えられるので、これには次節で言及したい。

では長大になるが、ストーリーの改訂点を確認しておく。個別版では、これまでも指摘されてきたように、冒頭が全く新しいそれに取り替えられた。『シメオンの話』では、会議に至った現実の背景が記されていたが、『ラテン人に対する話』では、神学的な話が綴られている。すなわち、異端の系譜にはじまり、それが教皇に入り込んだこと、そして教皇は悪魔と結託して会議の開催を決断したと。同時にここには、『シメオンの話』にあったような、ビザンツ皇帝と総主教は全く登場しない。会議の開催はあくまで教皇が悪魔の教唆によって行ったと改訂された。¹⁹

また、会議への参加を求めるイシドールと会議への参加を止める大公とのやりとりが詳細にされた。『シメオンの話』とは異なり、ここで大公は神学的な論拠を持ち出してイシドールの会議行きの阻止を試みた。聖人たちの規則に依拠する大公の姿は、既に俗人ではなく聖職

者然としている。ここには、正教の守り手としてのモスクワ大公、ツァーリの理念型が描かれている。イシドールは大公に反論できず、ただ参加を求めるだけであり、そこで大公は、イシドールが正教信仰から逸脱しないことを宣誓させて送り出すことになった。⁽²⁰⁾この場面はその後、イシドールの裏切りを想像させる伏線である。

会議がイシドールの到着を待った場面では、『シメオンの話』におけるルーシの地が偉大だからという理由が「正教が最も浸透しているから」と代わり、加えて大公ヴァシーリーの信仰心の大きさが理由として挙げられた。⁽²¹⁾

『シメオンの話』では、ここでイシドールのモスクワ出発、そしてその随行者の列挙、また教皇や皇帝らのフェラーラ入市の様子が描かれていたが、そうした記事は『ラテン人に対する話』では全て削除された。『ラテン人に対する話』では代わりに、イシドールが途中滞在したバルト沿岸のユーリエフの町において、早くも大公の前で行った宣誓を破り、カトリック式の典礼を行った話が挿入された。⁽²²⁾

次に来るのがイシドールのフェラーラ入りである。『シメオンの話』と異なり、『ラテン人に対する話』では、皇帝や総主教がイシドールを榮譽を持って出迎えた記事が削除され、全体も短くされた。⁽²³⁾この箇所もまた、皇帝らとイシドールとの関係に言及しないという傾向の表れと見なしうる。

続く会議議場の描写では、席の配置の説明には変化がないものの、カトリックおよび正教がそれぞれ代表を三名出した場面に変更が加えられている。すなわち、『シメオンの話』では正教側の代表者として、

エフェソスのマルコス、ニケーアのベッサリオン、そしてイシドールが挙げられていたが、『ラテン人に対する話』ではイシドールの名はなく、正教側は二名しか代表者を出していないことにされた。⁽²⁴⁾

会議開始後、三度の会合の様子については、『シメオンの話』では正教側の論者は座ったまま黙っていたとあったが、これが『ラテン人に対する話』では、カトリック側が何か述べても、ギリシア人は笑っていたとする記述に替えられた。⁽²⁵⁾

四度目の会合でのマルコスの発言とそれへのカトリック側の反論、続くマルコスの再反論について言えば、それは『ラテン人に対する話』では全体的にかなり具体化され、加えて多くの分量が割かれた。マルコスは『シメオンの話』においては、①教皇がこの会議を第八会議と呼んだが、これは過去の教父たちが否定したものであると、また②典礼にて自分(教皇)のことに言及しながらも、皇帝や総主教に言及せず、また冒頭でラテンを称え、次に正教を称えたとして、カトリックを批判していた。しかし、『ラテン人に対する話』では、より神学的色合いの濃い批判に交代させられている。そこでのマルコスは、カトリック側が偽りを述べ、聖なる父たちを冒瀆し、偽りの書物を持ち、種なしパンを使っていること等の定型的な批判をしている。『シメオンの話』ではその場で行われたことに対する批判であるが、『ラテン人に対する話』では、カトリックの教えが本質的に間違っていることが批判されているのである。⁽²⁶⁾

これを聞いたラテン人の反応にも差がある。『シメオンの話』では、彼らは最初反論できなかったが、その後枢機卿ジュリアーノらが反論

したとされる。『ラテン人に対する話』では、最初教皇にはマルコスの言葉が理解できなかったことが述べられ、その後枢機卿が教皇に内容を伝え、そして教皇が書物を引いて反論しようと試みたとされる。⁽²⁷⁾

次いでなされたマルコスの再批判については殆ど変更点はない。『シメオンの話』では、上に同じく、教皇のこの会議における態度が問題にされていた。すなわち、この会議を第八の会議と呼び、また冒頭で自分を称えながら、総主教に言及しなかったことが問題にされていた。『ラテン人に対する話』も同様である。⁽²⁸⁾

これに激怒したカトリック側は大半が席を立った。退出後に残ったのは、『シメオンの話』ではギリシア人だけであつたとされていたが、『ラテン人に対する話』ではルーシ人も残つたとされている。⁽²⁹⁾ またここで、シメオンと主教ドロテオスとの間で交わされた個人的な話が完全に削除されている。

退出後の皇帝とマルコスの話の場面では、『シメオンの話』の場合、会議における教皇の態度が問題にされていた。すなわち、合同だというが実際にはラテンへの正教会の吸収であるという批判である。また彼らは正教徒に礼を尽くさないともある。しかし『ラテン人に対する話』では、そうした話は削除されないままに、またもや神学的な話が増えられている。彼らはキリスト教徒ではあり得ない。彼らは正しいことを受け入れることができないと。⁽³⁰⁾

その後、カトリック側は金品攻勢に切り替えたが、『シメオンの話』におけるこれに関する長大なテキストは、『ラテン人に対する話』で

大幅に切り詰められた。前者ではカトリックからの皇帝らへの攻勢を受け取って帰国しようとする皇帝へのマルコスの苦言についてまず述べられた。そしてそれにも拘わらず皇帝らは受け取り、加えてマルコスにも受け取るよう説得し始めたこと、だが彼は固持したこと、加えて皇帝らは更に金銭を受け取って、会議をフィレンツェに移動させることにし、イシドールがこれを手助けしてフェラーラを出発し、山を越えてフェレンツェに入ったことが記されていた。『ラテン人に対する話』ではこれが切り詰められて、カトリックの金銭攻勢が続き、イシドールの奸計によりフェレンツェへの移動が決定され、マルコスはこれを批判したがギリシア人は皆、フィレンツェ入りしてしまつたとされる。⁽³¹⁾ また『シメオンの話』では皇帝らギリシア人は幾度も金銭を受け取つたとされるが、『ラテン人に対する話』では一度の言及だけである。また、前者にあつたフィレンツェの町並みの描写は完全に削除された。

会議再開後、総主教ヨシフが亡くなるまでの経緯については、『シメオンの話』と『ラテン人に対する話』は比較的一致しているが、後者では部分的に省略がなされている。前者ではマルコスを説得させる目的での様々な手段が言及されている。同志のギリシア人に合同の調印が強要された。またカトリック側のヨハネスという者がマルコスを批判するが、その彼は自宅に戻って急死した。皇帝はマルコスに怒りを覚えたが、府主教たちは分裂した。そうした中で総主教が死去する。こうした場面は『ラテン人に対する話』においても大まかには同じだが、前者ではマルコスはパウロを引いて反論していたのに対し、後者

ではダビデが引用されている点、また後者では、神がかつたヨハネスの死についての話が削除されている。

総主教の死後、会議終了までについては、『シメオンの話』での長い話がばつさりと短くされた。『シメオンの話』では依然としてマルコスの説得が続く、マルコスを批判したラテン側の某アンブロシウスが死去するという話があるが、『ラテン人に対する話』ではマルコスら四人の府主教が逃亡し、それを皇帝の使者が追ったが、逃げおおせた者があつたことが記されている⁽³⁵⁾。

続いて、署名後初の典礼の場面を描いた『シメオンの話』の記述は、『ラテン人に対する話』では基本的に変わりはない。⁽³⁶⁾

その後、『シメオンの話』では、アヴラーミーの署名の場面、そしてシメオンの署名拒否について話されているが、『ラテン人に対する話』ではこれが完全に削除され、皇帝の罪が長大な文で列挙されている⁽³⁷⁾。

その後の推移は、『シメオンの話』と『ラテン人に対する話』とは大きく異なる。モスクワの使節団は帰国の途につくが、『シメオンの話』はシメオンの視点で、『ラテン人に対する話』はイシドールの視点で記されている。すなわち前者ではヴェネツィアからの逃亡、ノヴゴロドでの寄留、そしてスモレンスクにおけるイシドールによる捕縛、モスクワへの連行という一連の出来事が記されているが、後者では、ブダに到着したイシドールが、ポーランド、リトアニア、ドイツに、教会合同が成立したとする旨の布告を送ったことが叙述され、その後その布告のテキストそのものが挿入された⁽³⁸⁾。シメオンに関する記

述は全て削除された。加えてその最後にあつた、皇帝ヨハネスとイシドールは異端、ギリシア人は銀を好むとする非難も削除された。

モスクワ帰国後についても『シメオンの話』と『ラテン人に対する話』とは内容が異なる。前者では、イシドールがいかに教皇と懇意であつたかが記された後に、モスクワにおけるウスペンスキー聖堂でのカトリック式典例の執行の場面が描かれる。後者ではモスクワ到着後すぐに典礼記事があり、次いで大公宛ての教皇勅書の全文が挿入されている⁽³⁹⁾。

そして結末が描かれる。『シメオンの話』ではイシドールの廃位について手短かに記されるが、『ラテン人に対する話』ではヴァシーリー大公が正教の守り手として異端イシドールを逮捕し、投獄したことが語られた後、彼の脱獄について記される⁽⁴⁰⁾。これまでの研究者が明らかにしてきたように、その叙述では、リトアニア大公国下の主教たちに宛てた一四六〇年の府主教ヨナの書簡のテキストが一部利用されている⁽⁴¹⁾。

その後に来るのは両者においてヴァシーリーへの頌詞である。但し『ラテン人に対する話』では神学的な抽象論が増やされており、大公がソロモンを始めとする過去の賢き君主たちになぞらえられ、異端イシドールの手から神の教会を守ったことが記されている⁽⁴²⁾。

『シメオンの話』はここで終わるが、『ラテン人に対する話』ではヨナの選出について話が続く。記事自体は簡素で、イシドールを追放して、真の正教を取り戻したものの、ツァーリ・ヴァシーリーは、聖なる教会に指導者がいないことに心を痛めた。そこで、教会を揺るぎな

きものするために全国の大主教や主教に始まり、賢者や修道士に至るまでを招集し、新府主教を選出するための典拠を聖なる書物のなかに探させた。彼らはいかにこれを見出し、ヴァシーリーに報告した。そこで彼らはリヤザン主教ヨナを全ルーシの府主教に選出し、大公と共に神と聖母に祈りを捧げた。ヨナは聖務を開始し、民を祝福した。こうした話が続く。その後は、ヨナの叙任により、ルーシの地に正教が繁栄した様が描かれる。⁽⁴⁶⁾

続いて描かれるのは、ローマからのイシドールの弟子グリゴリーの到来、そしてモスクワにおけるその拒絶、続いてヨナの死と新府主教フェオドーシーの選出についてである。

イシドールはモスクワから逃亡し、ローマに戻った後、教皇のもとで活動を再開し、弟子のグリゴリーを「全ルーシの府主教」として派遣することを提案し、これは了承され、グリゴリーの叙任がなされた。グリゴリーは、教皇から布告文書を受け取り、リトアニアに到着した。時のリトアニア大公カジミエラス（在位一四四〇―九二年）は、国内状況を考慮してそれまでは教会合同を認めず、リトアニア大公国内の正教府主教区におけるヨナの権威を認めていた。当時、モスクワとリトアニアは教会管轄上、単一の「全ルーシの府主教区」のもとにあったからである。しかしここにおいてグリゴリーを受け入れ、更にはモスクワに使者を派遣し、グリゴリーを受け入れるよう勧告した。⁽⁴⁷⁾

その後は、教皇批判と真の正教の守護者ヴァシーリーへの称賛が続いた後、いかにラテン人が正教から離れたかに関する長大な神学論文

が続く。⁽⁴⁸⁾

続いて、ヴァシーリーによる受け入れの拒絶、そしてヨナによるリトアニア大公国下の府主教たちへの、グリゴリーを受け入れぬようにとの書簡の送付、ヨナの死後におけるフェオドーシー選出の経緯が描かれる。⁽⁴⁹⁾

そして最後に教会の庇護はツァーリの責務であることが論じられて、『ラテン人に対する話』は終わる。⁽⁵⁰⁾

以上の『ラテン人に対する話』への改訂作業の特徴を、幾つかの点にまとめることが出来る。

第一に、個人的な体験記から一般的な話へ改訂された。シメオンの個人的体験談は全て削除された。

第二に、神学的な装飾が全体に重厚になされた。とりわけ冒頭部は特徴的である。会議の開催は、異端が教皇に入り込んだ結果とされた。

第三に、この『話』はフェオドーシーの選出で締め括られており、その正当化が目的であったと考えることができる。シメオンの体験記はここではその実現のために利用されている。すなわち、いかに会議が問題含みであったか、そしてそれを主導したイシドールがいかに異端であったか。シメオンの記事は、そのことを描くために利用された。このことによつて『話』はイシドールの弟子グリゴリーもまた背教者、異端であることを論じ、そのことによつて、ヨナ、そしてフェオドーシーの選出を正当化しているのである。同時に、教皇とカトリックも異端であることが強調された。他方、大半のギリシア人は罪に問われなくなった。皇帝と総主教についてさえ、完全ではないものの、

彼らの正教に対する裏切り行為の描写が削られた。既にビザンツが滅んでいたこの時期において、自立を果たしていたモスクワにとってビザンツ批判は無用の長物であったと考えられる。

第四に、これまで指摘されてきたように、ルーシの地の地位が、そしてヴァシーリーの地位が上昇させられた。これは第三の改訂点と表裏一体をなしている。彼は多くな場面でツァーリ(「皇帝」と呼ばれ、また正教の守護がその責務とされた。その意味で相対的にビザンツの地位は低められているのだが、とはいえ、上述のように、ビザンツを直接的に批判する事例は殆どない。

作成者については、上述のように、パホーミー・セルプとする説とシメオンとする説がある。だがシメオンについては上述のように論拠らしい論拠もなく、パホーミー説が有力視されている。

作成者が聖職者であることは間違いないだろう。上述のように、内容は神学的装飾が甚だしく、その方面の知識が作成者には求められただろう。

トロイツェ・セルギエフ修道院に滞在したパホーミーが『聖セルギイ伝』にシメオンに関する話を掲載したことは事実である。また南スラヴ的な用語の使用が入り込んでいるとする説、そしてツァーリという言葉が使われている点もその説の裏付けになる。但し残念ながら決定的な論拠がないことも事実である。パホーミー説は有力な説ではあるが、この説を正しいとするには更に裏付けが求められよう。

(三)『ラテン人に対する話』成立の文脈

この『ラテン人に対する話』が作成された直接の契機は、最後にあるフェオドーシーの選出、叙任の正当化にあることは言うまでもない。もちろん『ラテン人に対する話』はヨナの選出の正当化も兼ねているが、この『話』の成立時期、そしてフェオドーシーで話が終わっている事実は、フェオドーシーの選出こそが改訂の直接の契機になったと考えることを可能にする。では何故、この段階でこうした作業が行われたのか。この問題を考察するためには、まずイシドールの弟子グリゴリーの到来が与えたインパクトの大きさについて考える必要がある。

ヨナの多くの書簡によれば、グリゴリーはローマに亡命していた元総主教グレゴリオス・マンマス(在位一四四三―五〇年)から叙任されていた(教皇ピウス二世が叙任したとする説もある⁴⁶)。いずれにせよ、そのような候補者グリゴリーをもちろんモスクワは承認しなかったものの、彼はヒエラルヒー上位から叙任されていたという意味で一応の正統性を主張できた。だからこそ、リトアニアでは大公カジミェラス(当時はポーランド王カジミェシュ四世でもあった)が方針を転換して彼の府主教就任を認め、更にモスクワにも彼を受け入れるよう提案したわけである。こうした状況がモスクワの聖職者の間で危機感を生じさせたことは疑いない。彼の到来は自分たちが属するヒエラルヒーの正統性を揺るがす事件だったからである。

それ故に、この一四六一―六二年の段階においてフェオドーシー及び前任者ヨナの選出の正当化が行われたことはごく自然なのである。

しかし、そうした正当化は、一四四八年のヨナ選出の段階では行われなかったのだろうか。既に見てきたように、ロシア教会史における一大事とされる一四四八年の主教會議と府主教ヨナの選出後に、『シメオンの話』や『會議と旅』の改訂版は出現しなかった。イシドールの異端性を証明し、その「追放」を正当化する『シメオンの話』はヨナ選出の正当化に利用可能であつたはずだが、現実にはそうはならなかった。そうした消極的とも受け取られる姿勢は、筆者の考えでは、ヨナ選出時の状況と選出を正当化する言説を考察することで説明される。その考察は、他方で、グリゴリー到来の段階でのモスクワの聖職者が受けた衝撃の大きさを確認させる。

上述のように、モスクワは、一四四一年のイシドールの逃亡後、府主教をすぐに選出しなかった。彼らはコンスタンティノープルの判断を仰いでいた。廃位後すぐに大公ヴァシーリー二世はコンスタンティノープル総主教に書簡を送り、廃位の経緯を説明しようとした。⁽⁴⁶⁾ イシドールはモスクワでは廃位されたが、これが総主教座でどう判断されるかは別問題であつた。それ故にモスクワ教会は府主教を自分たちで選出することなく、待ち続けていた。

ところが国内の問題もあり、大公ヴァシーリーは一四四八年に主教會議でヨナを「キエフと全ルーシの」府主教に選出した。これは総主教の了承のない選出であり、その正当化が必要であつた。史料に示されているように、もちろん主教會議の中で、伝統的な教会の書物等に基づいてその正当化の根拠が探られた。⁽⁴⁷⁾ しかし、その正当化は対外的にも行われなければならないかつた。そこで新府主教ヨナは就任後すぐ

に、態度保留中のリトアニア大公国下の主教たちに文書を送り、おのが選出の正当化と、彼がリトアニア大公国下の正教会の長でもあることの正当化に努めた。⁽⁴⁸⁾ 一四五一年にはキエフの分領公アレクサンドル公にも同様の説明書簡を送っている。⁽⁴⁹⁾

そこでヨナの二通の文書を紐解くと、彼の選出の正当化が次のようになされたことがわかる。前者では、ルーシには長く府主教がおらず、そのために正教が「荒廃」し、いまや神は會議を開いて府主教を選出するよう「意志」を示された。⁽⁵⁰⁾ 五一年の書簡の場合も同様に、「これまでルーシに府主教がおらず、誰も派遣されてこなかった」ので、過去に独自に府主教選出した前例に基づき、ヨナを選出したとされる。⁽⁵¹⁾ つまり、ビザンツに対する批判に基づく受け入れ拒否がここで表明されたわけではなかった。そうではなく「待つていたが来なかった」ことがヨナ選出の理由とされているのである。

こうした言明は、事実を後から正当化するためには十分であつた。しかし、それは、裏を返せば、「待つていた者が来た」場合には、それを受け入れることを示唆しないわけではない。もちろんヨナにとつてその「待つている者」は、少なくとも正教に復帰した後のビザンツから来ることが想定されていたと考えられるが、そのことは書簡では一般的な形でしか記されなかった。

筆者の考えでは、ビザンツ「支配」への服属の継続は、当時まだ存在していたビザンツとの将来的な関係を考慮した場合の選択肢としては極めて現実的であつた。ビザンツの滅亡が未だ現実でない段階においては、それとの関係断絶にまで進んではならないとする思考が働い

たかのように思われる。現に、一四五一年に大公は最後の皇帝になったコンスタンティノス一世(在位一四四九―一五三年)に書簡を送り、イシドール廃位の経緯を説明している。⁽⁶²⁾ こうした行為はビザンツとの関係を断ち切ろうとしていたと考えることを戒める。ヨナ選出の正当化について言えば、それは以前と同じく「我々は長い間それ〔府主教の選出〕を求めたが、〔状況は〕良くならなかった」と述べられている。⁽⁶³⁾

そしてこうした中で、一四五八年に、ローマにて叙任された府主教グリゴリーが到来した。つまり「待つていた者が来た」のである。

モスクワがここで衝撃を受けただろうことは想像に難くない。対立候補がいるのであるから、余計にルーシ選出の府主教を正当化する必要があったと考えられる。同時に対立候補の非正統性(異端性)を論じることも課題になっただろう。ここでヨナの活動は以前にも増して活発化した。彼は一四六一年に亡くなるまで、様々な宛先人におのが正統性とグリゴリーの異端性を論じた八通の書簡を送っている。⁽⁶⁴⁾ また一四五九年のモスクワ主教会議ではヨナの正統性を認める文書が作成された。⁽⁶⁵⁾

これらの書簡を紐解くと、興味深いことに、それまでには殆ど言及されなかったイシドール及び会議への言及が至る所に蔓延していることがわかる。こうした事態が生じた論理的な道筋は以下の通りである。すなわち、グリゴリーの異端性を論じるために、その師であるイシドールの異端性が、またグリゴリーを叙任したローマ在住の元総主教グレゴリオスの異端性が強調され、そしてカトリックの策略なる呪

わしきフェラーラ・フィレンツェ会議以来、彼らが背教者、異端者なのであるという言明が幾度も繰り返されているのである。⁽⁶⁶⁾ 他方でビザンツ皇帝やその臣民(ギリシア人)が非難されることは皆無である。こうした論理での批判はヨナの死後、後継者である新府主教フェオドーシーによっても継続された。⁽⁶⁷⁾ その後、一四六五―一七〇年頃の新大公イヴァン三世(在位一四六二―一五〇五年)の書簡においてもその内容は繰り返された。⁽⁶⁸⁾

そうした内容は、既に明らかなとおり、上述の『ラテン人に対する話』で論じられた点の、そして改訂箇所の特徴と合致する。グリゴリーの異端性、また彼を叙任した教皇、そしてカトリックがいかに正教から離れて異端に陥っているのが強調された。また、『シメオンの話』では会議の結果、正教はルーシにおいて残ったとされていたのが、『ラテン人に対する話』では正教の守護が大公の責務とまでされた。そしてギリシア人への批判は薄まり、グリゴリーを送り出してきたカトリックこそが批判の対象になったのである。

但し、この『話』が、あくまでも聖職者向けの著述であることには注意を要する。グリゴリー到来に起因する危機感はずその直接の利害関係者のなかで増大し、この『話』の作成に彼らを導いたのである。さて最後に確認しておきたい。以上の議論により筆者は、教会史として政治的に重要とされるこの会議とヨナ選出が、後代には重要と見なされるようになったものの、同時代的(一四四〇年代)には重大事と認められていなかったと主張しているわけではない。会議もヨナの選出も同時代の文脈において一定の意味を有した。但し会議につい

てはその同時代人がモスクワ教会のビザンツ教会ヒエラルヒーからの自立の良き機会であると考えていた節はない。ヨナ選出もこれまでと異なる手続きを嫡余の策として独自にとったという意味で重要である。しかし、やはりそれが独立志向を背景にしていたと言えまい。すなわちそれ自体が生じた文脈、或いはそれに起因する文脈とは異なる、新たな意味が後代になってこれらの出来事に付されたと筆者は言いたいのである。

注

- (1) これ自体は伝来しないが、一五世紀末の大公年代記集成及びヴオスクレセンスカヤ年代記がこれを反映している。СДП. Вторая половина XIV-XVI в. ч. 2, С. 32-33.
- (2) Лурье, Идеологическая борьба, С. 368-372.
- (3) Лурье Я. С. Общерусские летописи XIV-XV вв. Л., 1976, С. 234, 238-239.
- (4) Синицына, Третий Рим, С. 101-102.
- (5) Синицына, Третий Рим, С. 102.
- (6) Синицына, Третий Рим, С. 102-103.
- (7) Синицына, Третий Рим, С. 102-103.
- (8) Понев, Историко-литературный обзор, С. 359.
- (9) Паское, Критические опыты, С. 106.
- (10) Паское, Критические опыты, С. 105-108.
- (11) Паское, Критические опыты, С. 99-100.
- (12) Малинин, Старец Елеазарова монастыря, С. 98.
- (13) Делекторский, Критико-библиографический обзор, С. 146-147.
- (14) Делекторский, Критико-библиографический обзор, С. 147-149.
- (15) Вальденберг В. Древне-русские учения о пределах царской власти.

Пг., 1916, С. 171.

- (16) Лурье, Идеологическая борьба, С. 368.
- (17) Синицына, Третий Рим, С. 109.
- (18) Синицына, Третий Рим, С. 109.
- (19) Понев, Историко-литературный обзор, С. 360-362.
- (20) Понев, Историко-литературный обзор, С. 362-363.
- (21) Понев, Историко-литературный обзор, С. 364-365.
- (22) Понев, Историко-литературный обзор, С. 363-364.
- (23) Понев, Историко-литературный обзор, С. 365.
- (24) Понев, Историко-литературный обзор, С. 365.
- (25) Понев, Историко-литературный обзор, С. 365.
- (26) Понев, Историко-литературный обзор, С. 365-367.
- (27) Понев, Историко-литературный обзор, С. 367.
- (28) Понев, Историко-литературный обзор, С. 367-368.
- (29) Понев, Историко-литературный обзор, С. 368.
- (30) Понев, Историко-литературный обзор, С. 368-369.
- (31) Понев, Историко-литературный обзор, С. 369-370.
- (32) Понев, Историко-литературный обзор, С. 371.
- (33) Понев, Историко-литературный обзор, С. 371-372.
- (34) Понев, Историко-литературный обзор, С. 372-374.
- (35) Понев, Историко-литературный обзор, С. 374-375.
- (36) Понев, Историко-литературный обзор, С. 375-377.
- (37) Понев, Историко-литературный обзор, С. 377-379.
- (38) Русская историческая библиотека (РИБ). т. 6. СПб., 1908, №87, С. 654-655.
- (39) Понев, Историко-литературный обзор, С. 379-381.
- (40) Понев, Историко-литературный обзор, С. 381-383.
- (41) Понев, Историко-литературный обзор, С. 383-385.
- (42) Понев, Историко-литературный обзор, С. 385-391.

- (43) *Доное, Историко-литературный обзор*, С. 391-394.
- (44) *Доное, Историко-литературный обзор*, С. 394-395.
- (45) 例えば РИБ., т. 6, С. 621, 633. G・ヴェルナツキーはこの説を探り、加えて教皇ピウス二世がそれを追認したとする。Vernadsky G. *Russia at the Dawn of the Modern Age*. New Haven, 1959, p. 33. しかしシニツィナによれば、現実の経緯は複雑であった。それによると一四五八年九月三日に教皇ピウス二世 (在位一四五八-一四六四年) によりイシドールが「上ロシア」の、グリゴリーが「下ロシア」の府主教に任命された。しかし、この時にはポーランド王になっていたカジミェラス (カジミェシュ) はイシドールを拒絶した。一四五九年一月のグレゴリオス・マンマスの、同月のイシドールのカジミェシュ宛て書簡では、既にグリゴリーが「上ロシア」と「下ロシア」の府主教であると記されているという。Синицына, Третий Рим, С. 90. 『ラテン人に対する話』においても、明示はされないもののグリゴリーの叙任は教皇により行われたように記されている。Доное, Историко-литературный обзор, С. 383.
- (46) РИБ., т. 6, С. 525-536. フェネルによると、これは実際には送付されなかったという。Fennell, *The History*, p. 182.
- (47) 例えば *Доное, Историко-литературный обзор*, С. 381.
- (48) РИБ., т. 6, С. 539-542.
- (49) РИБ., т. 6, С. 555-564.
- (50) РИБ., т. 6, С. 539-540.
- (51) РИБ., т. 6, С. 559-560.
- (52) РИБ., т. 6, С. 578-581. この時期には既に総主教グレゴリオスはローマに逃亡していた。
- (53) РИБ., т. 6, С. 582.
- (54) РИБ., т. 6, С. 619-626, 631-634, 635-640, 639-644, 645-658, 657-664, 664-670, 671-674.
- (55) РИБ., т. 6, С. 627-632.

- (56) 例えばリトアニアの主教たちに宛てられた回状ではまさに全体がそれで埋め尽くされている観がある。РИБ., т. 6, С. 619-626.
- (57) РИБ., т. 6, С. 689-694.
- (58) РИБ., т. 6, С. 707-712.

三 大公年代記への『ラテン人に対する話』の挿入とその国家イデオロギー化 (七〇年代末)

『ラテン人に対する話』は更に改訂され、一四七九年版の大公年代記集成に入った。

それまでの年代記の伝統を一瞥すると、興味深いことに、フェラーラ・フィレンツェ会議についても、またヨナ及びフェオドーシーの選出についても簡素な記事しか存在しなかったことがわかる。これはノヴゴロド及びプスコフの年代記等モスクワ以外の年代記の伝統においても同様であり、このことは、上記の出来事がルーシの、少なくとも同時代の年代記作者にとつては極端に多くの紙幅を割いて取りあげるまでの事件ではなかったことを意味する (筆者はもちろん、意味がなかったと言おうとしているわけではない)。

こうした考えは、既にルリエーによつて述べられている。すなわち、ルーシのイデオロギー闘争の歴史において、一四七〇年代に「保守化」が生じ、シメオンの叙述に起源を持つフェラーラ・フィレンツェ会議関連の記事が一四七九年版の大公年代記に挿入されたと。具体的に言えば、以前の年代記記事を部分的に残しつつ、『ラテン人に対する話』の改訂版 (上) という『大公年代記版』が大公年代記集成に挿

入されたのである。^①

その結果、以前からの伝わる会議に関する年代記事と、挿入された大公年代記版の『ラテン人に対する話』とが右のように年代記に共存することになった。

一四七九年の大公年代記集成

一四三八年の項

イシドールの到着と会議への出発に関する元々の簡潔な年代記事が冒頭に据えた「大公年代記版」版『ラテン人に対する話』（イシドールの脱獄で話が終わる）

一四四〇年の項

イシドールの帰国と彼の投獄に関する簡潔な年代記事。

一四四一年の項

イシドールの脱獄に関する簡潔な年代記事。

ここからわかるように、「大公年代記版」の『ラテン人に対する話』は、イシドールの脱獄までしか伝えていない。他の部分がなぜ年代記に含まれなかったのか、それは明らかでない。「大公年代記版」の話には「第八会議について」という表題があるので、年代記編者は当初から会議に直接関連する部分だけをここに掲載しようとしたと考えられる。では、ヨナ及びフェオドーシー選出を中心とした記事はどこに行ったのか。

恐らくこれに関する回答は単純である。すなわち、以前からの年代

の記事を交代させるほどの内容を『ラテン人に対する話』は含んでいなかった。もちろん、この記事は『ラテン人に対する話』において長大であったのだが、神学的内容を除き、事実のみを取り出すならば、極めて簡潔な記事だけが残る。

さて以下では、この「大公年代記版」が出現した文脈を考えるために、その内容を見ておこう。注目すべきは、オリジナルの個別版『ラテン人に対する話』からの改訂点である。

まず冒頭部では、『ラテン人に対する話』にあった、神学的な冒頭部が完全に削除された。すなわち異端が教皇に入り込み、会議を開催させたとする冒頭部である。「大公年代記版」では、イシドールの到来からすぐに話が始まっている。^② 会議に出席すべきであるとするイシドールとそれに反対の意を表明する大公との対話においては、更に二カ所、神学的な部分（イシドールが大公の意見を聞き入れなかったことをソロモンを引き合いに出して説明する部分。^③ イシドールは自分を比類なき賢き者と考えたが、彼は主の言葉を理解していなかったとする箇所（マルコ伝九・三五）^④）が削除された。またユーリエフでイシドールがカトリックの典礼を行った際に彼が正教の十字架に触れなかったことが『ラテン人に対する話』では神がそうさせたからと説明されていたが、これも削除された。^⑤

続いての大きな変化は、既に教会合同決議後の教皇エウゲニウスの典礼の描写にある。『ラテン人に対する話』にあった、皇帝がなした罪一つ一つへの神学的批判、嘆きが削除されている。^⑥ またそれに続く、キエフ大公ウラジーミルを称える抽象的文章も削除された。^⑦

更には、教皇エウゲニウスの合同に関する勅書のテキストが挙げられた後、『ラテン人に対する話』では聖なる規則を守りとも賢き大公ヴァシーリーへの賛辞があったが、これも削除された。

更に、投獄中のイシドールの状況が聖書の預言書〔出典不明〕の引用でたとえられていたが、これも削除された。脱獄後については、「このようにして彼らはローマに去った」とする短い一文が削除された。

最後に、ヴァシーリーを称える頌詞が、冒頭の一文を残して全て削除された。以下の文、つまりヨナやフェオドーシー選出の話は全て削除された。

挿入された箇所は、基本的に手直しに過ぎない。『シメオンの話』にはあったが『ラテン人に対する話』で欠如した細かな点の補足(会議参加者の列挙の際に、グルジア皇帝の府主教を補足。また会議におけるアンティオキア総主教代理としてのイシドールの任命。教皇勅書のテキストにおける部分的補足。勅書を読み終えた直後の接続文)が殆どである。

こうした改訂箇所は、まさに事実として考えられる事項のみを年代記に簡潔に掲載するするという大公年代記としての体裁に合わせるためになされたものと見なしうる。神学的な説明は徹底して削除された。この没主観的とも言える作業には、恐らく、俗人が関係していた。彼らにとつては、ただ事実と思われる内容載せることが仕事であった。また、既にフェオドーシー選出時の危機は過去のものとなり、ローマから派遣された府主教グリゴリーには、少なくとも一四六〇年代初頭の記事で全く言及されない。年代記に従えば、単にヨナが死

去し、フェオドーシーが選出されただけである。

加えて、述べられるべきは、挿入された部分は、元々の『ラテン人に対する話』の構成で言えば、フェオドーシーらの主張の正当化のための「前史」であった。『シメオンの話』は、この正当化のためにイシドール及びカトリックに対する批判を強める方向で大幅に改訂されたことを既に見たが、大公年代記には『ラテン人に対する話』の最大の主張は入らずに、反イシドール及び反カトリック色の濃い「前史」のみが利用されたのである。

さてこうした叙述の特徴とは別に、これが公式年代記に入った経緯を、ルリエーの説を参考にしながら考察してみたい。

ルリエーは、この時期における大公年代記の「保守主義」の強化について論じた。彼はこの言葉を定義していないので、実はその内容は判然としない部分があるのだが、彼が挙げた例を見る限り、それは年代記が過去を「保守的」に再構築しようとする動きのように理解できる。彼が例に挙げるのは、一四七〇年代のモスクワによるノヴゴロド遠征に対する評価の変化である。この遠征は本来はロシア集権国家の形成における大きな一歩であったが、「保守主義」の傾向の中で再解釈された。すなわち、ノヴゴロドは一〇世紀からずっと大公の領土であり続けたと理解し直されたという。他方、一四七一年のノヴゴロド遠征の際には、ノヴゴロドの「下層民」が大公をノヴゴロド貴族から彼らを守る守護者として支持したが、これも一四七二年集成では別様に描かれているという。すなわち、貴族らが大公を支持し、下層民が大公の敵対者であったと記されているという。その他に彼は、

一四七二年と一四七九年集成においてモスクワのウスペンスキー聖堂の建設が、「第三ローマ論」のような議論をする可能性を有したものの、保守主義のせいでは、そこには至らずに、ウラジーミルのウスペンスキー聖堂と結び付けてしまったと述べる。¹⁵⁾そして保守主義の事例として、最後に、フェラーラ・フィレンツェ会議の記事について述べた。彼によれば、元々は反ラテン的傾向を帯びたものではなかったにも拘わらず、七〇年代初頭にコンスタンティノープル総主教がリトアニアのグリゴリーに全ルーシの府主教であることを認めたこと(一四六九年)で反カトリック傾向が強まったという。そしてその結果、一四七九年の大公年代記集成にこれが挿入された。ルリエーは「保守主義」についてこのように述べたのだが、それでも尚、「保守主義」の具体的な意味はここまで来ても判然としない。しかし、本稿にとつては、フェラーラ会議の事例に関する彼の議論があれば十分であるから、話を進めよう。但し「保守主義」という話はその定義が困難であるがゆえに、以下では使用せずにおく。

さてルリエーは、一四七〇年代にリトアニア府主教座が全ルーシの府主教座として承認されたことがモスクワ年代記における『ラテン人に対する話』の挿入の原因と見なした。この説は理解できないわけではない。なぜならそれはモスクワの利益と全く対立するからである。但し承認は一四六九年であり、若干のタイムスパンがあることは否めない。

筆者が補足しておきたいのは、そうしたリトアニアの状況も含め、モスクワが明らかに北東ルーシの中心としての地位を確立し、相応の

「全ルーシ」的アイデンティティを模索する時期に来ていたと考えられることである。また一四七二年の大公イヴァン三世がビザンツ皇帝家から大公妃にソフィアを迎えたことも重要であろう。その後の正教の庇護者意識の形成に鑑みるならば、既に七〇年代末の時期にモスクワは反カトリック色を打ち出していこうとし、その際にフェラーラ・フィレンツェ会議を描いた『ラテン人に対する話』に白羽の矢が立つたと考えられるのではあるまいか。先に述べたように、その際には、既に過去になったヨナとフェオドーシー選出に関する部分は完全に削除された。つまり、会議の問題性、異端性を描いた部分だけが選ばれたのであり、まさにこの部分に、大公年代記の編者の関心があつたと考えられる。

注

- (1) ルリエーはこの記事の挿入を年代記の一四七七年の項になされた
と記したが明らかに「一四三七年の項に」の間違いがある。ПСРЛ, т. 8,
С. 100-106, 108-109; ПСРЛ, т. 25, М., 1949, С. 253-260, 260-261; СДЛ,
Вторая половина XIV-XVI в. ч. 2, С. 335.
- (2) Пономев, Историко-литературный обзор, С. 360-362; ПСРЛ, т. 25, С.
253.
- (3) Пономев, Историко-литературный обзор, С. 362-363; ПСРЛ, т. 25, С.
253.
- (4) Пономев, Историко-литературный обзор, С. 363; ПСРЛ, т. 25, С. 253.
- (5) Пономев, Историко-литературный обзор, С. 364; ПСРЛ, т. 25, С. 253.
- (6) Пономев, Историко-литературный обзор, С. 372-373; ПСРЛ, т. 25, С.
257.
- (7) Пономев, Историко-литературный обзор, С. 377; ПСРЛ, т. 25, С. 259.

- (8) *Попов, Историко-литературный обзор*, С. 378; ПСРЛ, т. 25, С. 259.
- (9) *Попов, Историко-литературный обзор*, С. 378; ПСРЛ, т. 25, С. 259.
- (10) *Попов, Историко-литературный обзор*, С. 364.
- (11) *Попов, Историко-литературный обзор*, С. 365.
- (12) *Попов, Историко-литературный обзор*, С. 376-377.
- (13) *Попов, Историко-литературный обзор*, С. 378.
- (14) *Лурье, Идеологическая борьба*, С. 365-366.
- (15) *Лурье, Идеологическая борьба*, С. 366.
- (16) *Лурье, Идеологическая борьба*, С. 366-367.

結びに代えて

これまでの研究において、フェラーラ・フィレンツェの教会合同会議はモスクワ府主教座教会独立の直接の契機にはならなかったと考えられてきた。そうした見方自体には筆者も同意する。ただ、そうした研究は、後にモスクワ府主教座教会独立が会議と結び付けられていく図式の成立過程には関心を向けなかった。まさにその過程に焦点を絞ったのが本稿である。ルリエーとシニツィナの研究は類似の関心を有し、本研究にとって非常に参考になったが、ルリエーは一五世紀の国家イデオロギーの変容過程に、シニツィナは「第三ローマ論」の形成過程に関心があり、その一部として会議を描く史料群を検討し、その変容過程を論じていた。そのために、会議と教会の独立が結び付けられていく過程が十分に論じられなかった。

本稿において筆者は、一四五八―一六一年頃に、モスクワにおける会議観が大きく変わったことを確認した。元々のシメオンの体験記は、

彼が合同派ではないかと疑われた際に彼の弁明の書の意味合いを持ち始めた。そこでは自分は合同に反対していたことが論じられ、他方で皇帝やイシドールこそが合同を進めた張本人であったとする記述が増した。その後、シメオンの私的な記述は、長い間文筆家たちの関心を引きつけないように見える。一四四八年にモスクワはイシドールの廃位後長く空位であった府主教座に、総主教の了承なしでヨナを選出した。これは、待てどビザンツから新府主教が到着しないことを背景とした窮余の選択であり、ビザンツが存在していた時期においては十分に現実的な判断であった。ビザンツと関係を絶つ意志はないが、反応がない以上こちらで府主教を選出したという、ヨナ選出を正当化する方便は、ヨナ自身により、リトアニア大公国下の主教たちにおのが府主教就任を説明した際に利用された。一四五三年にはビザンツが滅亡した。そのことにより、今や十分にモスクワによる独自の府主教選出は確固としたものになったかに見えた。

しかし、一四五八年のグリゴリーの到来は、モスクワの教会聖職者たちを困惑させた。ビザンツの滅亡により、正統性を主張しうる候補者の到来はあり得ないはずであったが、半ばそのような者がローマから到来した。彼は合同派の元総主教から叙任され、現にリトアニアでは受け入れられた。ここにおいて、シメオンのテキストが息を吹き返す。それは、ヨナの自己正当化、その後はフェオドーシーの選出の正当化のために利用された。いかにローマからの候補者グリゴリーと彼の師イシドールがいかに「真の」キリスト教から逸脱しているか、合同がいかに神意にもとり、異端性を帯びていたか。シメオンの

テクストは改訂され、そうした点が強調された。同時に、唯一モスクワにのみ「真の」キリスト教が残った事実とその事実ゆえにヨナ及びフェオドーシー本人及びその選出が正統性を帯びていることが論じられた。正当化のロジックはここで大きく変わった。その後、問題が沈静化し、その反面、モスクワが北東ルーシをほぼまとめ上げ、地位を確立し始めた七〇年代末に、恐らくはモスクワが反カトリック的アイデンティティをおのの気にしていくなかで、神学的要素が排除された形で、反カトリック的言説で満たされた会議観が大公年代記に入り込んでいく。本稿で扱うことはできなかったが、そうした記述はその後、ソフィア第二（一五一八年集成）、ニコン、ヴォスクレセンスカヤ等の中心的年代記で更に改訂されていく。そこにおいて会議こそが独立の契機であったとする見方が更に強固にされていくように思われるが、これについては別の機会に論じたい。

尚最後に、再度強調しておこう。本稿筆者は上述のように、會議にせよ、またとりわけヨナの選出にせよ、同時代の人間にとっては相応の重要性を帯びていたことを否定するわけではない。しかし他方で、とりわけ會議について言えば、後代になり更にその重要性が高められ、また文脈の読み替えが生じたと考えているのである。